

「慢性病者の生活を理解する教育方法」による学生の学び

長谷川直人¹, 佐藤富美子², 佐藤 大介³

¹東邦大学医学部 看護学科

²東北大学大学院医学系研究科 保健学専攻

³東北福祉大学健康科学部 保健看護学科

Effect of Education Methods Enabling Nursing Students to Understand the Lifestyle of Chronically Ill Patients

Naoto HASEGAWA¹, Fumiko SATOH² and Daisuke SATOH³

¹*Toho University Faculty of Medicine, School of Nursing*

²*Department of Health Science, Tohoku University, Graduate School of Medicine*

³*Tohoku Fukushi University Department of Nursing, Faculty of Health Science*

Key words : Education Methods, Chronic Illness, Chronic Nursing

The aim of the present study was to clarify what nursing students learned when they used an education method of conducting interviews of chronically ill patients followed by group work based on the interview contents.

Content regarding four proposed themes was extracted from the post-assignment reports written by 120 third-year university nursing students and classified based on similarity.

In the theme “changes in lifestyle due to having a chronic illness”, extracted subcategories included ‘restrictions in daily life due to condition’ and ‘practicing self care’; “strategies to perform daily life” included ‘understanding health condition’ and ‘arranging living environment’; “role of people supporting lifestyle” included ‘reducing burdens in lifestyle’ and ‘accompanying them in treatment activity’; and, “role as a nurse” included the three subcategories of ‘support toward gaining control of the condition’, ‘support for treatment burden and worries about the illness’ and ‘education and reducing the burden for the family’.

Students learned about the reality of daily life and treatment strategies for chronically ill patients, the mutual role of chronically ill patients in society and as patients, and that treatment activity is a part of daily life. They were able to consider nursing that responds to these patient attributes.

I. 緒 言

近年の疾病構造は慢性疾患が中心であり、病気をコントロールしながら生活する慢性病者が今後さらに増加していくと考えられる。看護基礎教育

課程においては慢性病者への具体的支援方法について更なる教育の充実が課題である。

看護師には、慢性病者が健康を維持するために効果的なセルフケアを円滑に継続できるよう支援する役割を有している。そのためには、慢性病者

の病気の特徴だけでなく生活習慣、病気や健康に対する価値観、社会的役割や周囲との関係性などを含めて対象を理解すること、つまり、生活者としての視点で捉えることが常に必要とされる¹⁻³⁾。また、具体的な支援方法を検討する際は、慢性病患者にとって病院が一時的な療養の場であることを理解し、病者ととともにいかに日常生活とセルフケアの折り合いつけられる方法を見出せるかが重要とされている⁴⁾。

慢性病患者の生活の理解を深める教育方法には、看護学生が慢性病患者の日常生活そのものに触れたり、病気とともに生きる体験を聴き、入院を病みの軌跡⁵⁾のひとつのプロセスとして実感できることが重要と考える。しかしながら、現状の基礎教育課程では実習で入院加療する慢性病患者に関わり、そのような体験を聴く機会が非常に限られている。

筆者らは、成人看護学の授業の一環として「慢性病を有する人の生活を理解する」という課題を設定し、学生が慢性病患者にインタビューを実施して、その内容に基づいてグループワークをするという教育方法を実践した。各教育施設では同様の目的で多種多様な教育が実践されていると考えられるが、その方法や効果について検証した報告は非常に少ない。より良い教育のためには各教育施設が実施している方法を具体的に示し、適切に評価することが必要である。

本研究は、看護学生が慢性病患者の具体的な病気体験や生活を理解し、看護師としての役割を考察することをねらいとした教育実践における学生の学びを明らかにし、学習効果と課題について検討することを目的とした。

II. 研究方法

1. 対象

平成18年度および19年度のA大学医学部看護学科3年生(女性118名、男性2名の計120名)による「成人慢性期看護方法」の授業後の課題レポートを分析対象とした。

2. データ収集方法

学生に4月初旬の授業開始時にレポート課題を

提示した。文書(表1参照)および口頭で、課題の目的、目標、インタビューする時のキーワードと注意点を説明し、6月末までにインタビュー内容を整理するよう伝えた。インタビュー対象者は、学生の身近な成人期にある人で慢性病を持ちながら生活している人とした。なお、対象者の選定は学生に一任した。

6月末に学びを共有するためのグループワークを実施した。グループワークは1グループ7名から8名とし、90分間で各学生が自身の学びを発表しディスカッションする形式をとった。

7月末をレポートの提出期限とし、提出されたレポート(A4版3枚)を分析した。

3. 分析方法

学生が提出したレポートの中で、①慢性病を有したことによる生活の変化、②日常生活を送るための工夫、③生活を支援してくれる人の役割、④看護師の役割の4つのテーマについて記述されている文章を抜き出し、コード化した。抽出したコードは意味内容の類似性に基づき分類し、サブカテゴリー化した。その後、サブカテゴリーの内容が各テーマに合致しているかを確認した。また、分析の妥当性を確保するために、分析のプロセスを共同研究者間で共有し、内容を協議、検討しながら分析を進めた。

4. 倫理的配慮

学生にはレポート課題に取り組むにあたって、①インタビュー対象者に対して節度と誠意を持って依頼すること、②学生がインタビューした内容をレポートにし、グループワークをすることについて了承を得てからインタビューをすること、③インタビューの内容は個人が特定できない形式でデータ化し、レポートを作成することの3点を文書と口頭で説明した。その後、何か不明な点がないか質問を受け、説明内容が理解できていることを確認した。

研究実施の依頼は、学生全員に対して、提出したレポートの評価を含む成人看護学関連科目すべての単位認定評価が終了した後に行った。学生には全員が集まっている機会に、研究目的と方法、学生および対象者の匿名性の保持、同意の有無が

表 1. 学生に提示したレポート課題の内容

成人慢性期看護方法課題

慢性病を有する人の生活を理解する

【 目的 】

慢性病をもつ人の具体的な体験や生活を理解し、看護師としての役割について考察することができる。

【 目標 】

- 1) 慢性病を有したことによる生活の変化を知ることができる。
- 2) 慢性病をもちながら生活を送るために工夫していることを知ることができる。
- 3) 慢性病を抱え生活していくことを支援してくれる人の役割を知ることができる。
- 4) 慢性病を有する人への看護者としての役割を考察することができる。

【 方法 】

自分の身近な成人期にある人で、慢性病をもちながら生活している人にインタビューをし、レポートをまとめ、グループワークをする。

【 インタビューする時のキーワード 】

- ・慢性病を有したことで何か生活が変化したか
例：食事、仕事、家事、生活リズム、余暇、楽しみ など
- ・生活を送る上で一番困っていることは何か
- ・生活を送る上で工夫していることは何か
例：自助具、体位、家具、何かをするときの事前準備など
- ・生活を支援してくれる人と、支援内容は何か

【 インタビューする時の注意点 】

- ・看護学生としての節度と誠意をもってインタビューを依頼すること。
- ・インタビューで得た内容は個人が特定できないように留意し、プライバシーを厳守することを対象者に約束する。もちろん、厳守すること。
- ・インタビューをもとにレポートを作成し、グループワークをすることの了承を対象者に得ること。

【 レポートの形式 】

- ・用紙：縦 A4 用紙 枚数 3 枚
- ・文字ポイント：10.5
- ・内容に対象者の概要を簡潔に含めること。考察には文献等を活用し、引用文献を明記すること。

成績に一切関連しないこと、協力は自由意思であることについて口頭で説明し、協力意思がない場合は期日までに学籍番号のみを紙に記載して所定の BOX に投函するよう依頼した。

III. 結 果

1. インタビュー対象者の特徴

性別は男性 52 名 (43.3%)、女性 68 名 (56.7%)。

年齢層は 10 歳代 5 名 (4.2%)、20 歳代 15 名 (12.5%)、30 歳代 3 名 (2.5%)、40 歳代 35 名 (29.2%)、50 歳代 44 名 (36.7%)、60 歳代 14 名 (11.7%)、80 歳代 2 名 (1.7%)、不明 2 名 (1.7%) であった。診断名は、高血圧 28 名 (23.3%)、糖尿病 16 名 (13.3%)、椎間板ヘルニア 10 名 (8.3%)、高脂血症 9 名 (7.5%)、がん 7 名 (5.8%) が多かった。一方、花粉症や鼻炎等のアレルギー性疾患を

対象とした学生もいた。

2. 学生が課題から得た学び (表2)

1) 慢性病を有したことによる生活の変化

学生が記述していた「慢性病を有したことによる生活の変化」の内容から、【日常生活の制約】【セルフケアの実践】【受診機会の増加】【社会的交流の阻害】の4サブカテゴリーが抽出された。

【日常生活の制約】については、学生は、慢性病者は療養行動が必要となるために、今まで習慣となっていた食生活の修正を余儀なくされること、生活習慣の改善が必要であることはわかっているがそれを日常生活の中で実践し、続けることが非常に負担であることを記述していた。

【セルフケアの実践】については、慢性病者が高脂血症を有するため、コレステロールの高い食品を調べて量を決めて食べるようにしていることや、毎日夕食後に家族とウォーキングをするなど、慢性病者が自身の病状を考慮し、実践している具体的なセルフケアの方法を記述していた。

【受診機会の増加】については、慢性病を有することで定期的な受診が必要となるため、受診に伴って仕事を休んだり、家族に連れて行ってもらうなどの生活の調整を行っていることを記述していた。

【社会的交流の阻害】については、慢性病の症状により今までのような活動ができなくなったため、他者との交流の機会が減っていること、手術等に伴うボディイメージの変化のために積極的な行動が制限されていることを記述していた。

2) 日常生活を送るための工夫

学生が記述していた「日常生活を送るための工夫」の内容から、【健康状態の把握】【痛み・その他の不快症状の予防と緩和】【健康のための食事療法の遵守】【身体活動量を増やす】【休息の確保】【ストレスをためない】【生活環境を整える】【自助具の活用】【専門職のサポートの活用】【健康情報の収集】の10サブカテゴリーが抽出された。

【健康状態の把握】については、慢性病者が血圧測定や万歩計を活用することによって、自身の健康状態をモニタリングしていることを記述していた。

【痛み・その他の不快症状の予防と緩和】については、痛みが生じた際に温罨法や湿布の貼付をしていたり、症状の出現や悪化の予防を目的として鎮痛薬の内服や体操を行っていることを記述していた。

【健康のための食事療法の遵守】については、慢性病者が塩辛い食品を覚えて量を決めて食べていたり、食材に野菜を多く取り入れて総摂取カロリーを制限していたり、お酒を飲むときは1日ビール一本にするなど、必要とされる食事療法を日常生活でどのように行っているかが記述されていた。

【身体活動量を増やす】については、ウォーキングは必ず30分以上行うようにするなどの具体的な運動療法の方法や、買い物は自転車で行く、通勤を徒歩にする、職場ではエレベーターを活用しないといった生活活動量を増やすための具体的な工夫が記述されていた。

【休息の確保】については、慢性病者が疲労を蓄積しないために睡眠時間の確保に努めたり、長時間の労働は避けてこまめに休憩を取っていること、また、痛みを有する慢性病者の場合、スポーツを控えたり正しい姿勢を保持するといった痛みを予防する行動や、痛みを感じたときに休息をとるなどの対処行動をとっていることが記述されていた。

【ストレスをためない】については、慢性病者が日常生活に楽しみを見出せるよう意識したり、趣味や余暇活動を充実させたり、起床時間を早くしてゆとりを持った行動を心がけているなど、ストレスを溜め込まないためのセルフメンタルケアを行っていることが記述されていた。

【生活環境を整える】については、こまめに部屋を掃除したり、良眠が得られるようベッドをギャッジアップするなど、体調や症状に応じた環境調整の具体的な方法が記述されていた。

【自助具の活用】については、安楽な体位を保持するためにクッションや枕を使用して身体症状を緩和していること、長距離歩行時に杖を使用する、電動車椅子で外出するといった生活機能を保持するために自助具を活用していることが記述さ

「慢性病者の生活を理解する教育方法」による学生の学び

表 2. 学生が課題から得た学び

テーマ	サブカテゴリー	記述単位の例（インタビュー対象者の診断名）
慢性病を有した生活の変化による	日常生活の制約	・重いものを持つことができないので、仕事の種類と量の調整が必要になっている（腰椎椎間板ヘルニア） ・食事を全体的に減らさなくてはいけないし、今まで飲んでた加糖コーヒーが飲めない（糖尿病）
	セルフケアの実践	・しょうゆをかけないで食べたり、お弁当の中によっぱいものが入っていたら食べないようにしている（高血圧） ・食品交換表を用いて食事の準備をするようになった。また、1日8,000歩以上歩くようにしている（糖尿病）
	受診機会の増加	・潰瘍の処置のために毎週病院に通うことになった。また毎日薬を飲まなくてはならなくなった（クローン病） ・毎月1回は病院にかかって診察を受ける（高血圧）
	社会的交流の阻害	・足が痛くて今までやっていたゲートボールができない（変形性膝関節症） ・左乳房を全切除したため、以前は日帰り温泉に行っていたが、入りが気になり今はまったく行かなくなってしまった（乳がん）
日常生活を送るための工夫	健康状態の把握	・減量のために腹囲を測定している（肥満症） ・毎日決まった時間に血圧を測る（高血圧）
	痛み・その他の不快症状の予防と緩和	・運動する前に腰痛体操を行って、痛みが少なくなるようにしている（腰椎椎間板ヘルニア） ・歩くときに痛みがあるので、靴下の下にスポンジを切って、貼っている（慢性関節リウマチ）
	健康のための食事療法の遵守	・おはは妻の弁当を持っていくようにして、塩分と脂肪分を減らすようにした（高血圧） ・漬物が好きで、以前は毎日食べていたが、1日1回にして量を決めるようにしている（高血圧）
	身体活動量を増やす	・会社まで25分くらいなので、天気の良い日は自転車通勤するようにしている（高血圧） ・仕事場ではエレベーターを使わないで、休日の散歩を始めた（糖尿病）
	休息の確保	・心臓の休息を促すために1日30分程度休養をし、寝るときは側臥位を取るようにしている（WPW症候群） ・適度に休息をとって、マッサージをする（腰部脊柱管狭窄症）
	ストレスをためない	・趣味のピアノをデイサービスに行ったときに必ず弾いている（脳梗塞） ・友達と花見や旅行に行ったり、芋煮などをしている（高血圧）
	生活環境を整える	・部屋の掃除をまめにする（アレルギー性鼻炎） ・室内に手すりを設置した（脳梗塞）
	自助具の活用	・コルセットをつけて、座るときは座布団を使う（腰椎椎間板ヘルニア） ・抗がん剤をうった後、髪の毛が抜けたからしばらくはカツラをつけていた。家以外では補正下着を着けている（乳がん）
	専門職のサポートの活用	・行政で行っている健康教室に参加する（糖尿病） ・友人の栄養士に食事の相談のしてもらっている（高血圧）
	健康情報の収集	・新聞で記事があったときは切り抜いている（高血圧） ・テレビや新聞など健康に関する情報を集めている（高血圧）
生活を支援してくれる人の役割	療養上の負担を軽減する	・子どもたちに炊事や洗濯をやらせてもらっている（脳梗塞） ・カロリーを考えながら食事を作ってくれる人がいる（糖尿病）
	困難な生活機能を補う	・痛みがひどいときは家事を手伝ってくれる（腰椎椎間板ヘルニア）
	症状による苦痛の緩和	・マッサージをしてくれる（頸椎椎間板症）
	気持ちを支える	・病気を理解してくれて精神的な支えになっている（クローン病）
	療養行動を一緒にとる	・家族全員の食事を薄味にして、自分に合わせてくれている（高血圧） ・一緒に散歩に付き合ってくれる（糖尿病）
	療養上の相談と情報提供	・病院に一緒に行き、痛みの予防や対処の仕方について聞いてくれる（腰椎椎間板ヘルニア） ・食事は自分で作るが、量が多すぎないか、味付けが濃くないか夫や娘が注意してくれる（高血圧・高脂血症）
療養環境を調整する	・通院時に車で送ってくれる（脳梗塞） ・家を改装する（脳梗塞）	
看護者としての役割	病状コントロール習得に向けた支援	・運動療法継続のために、できることから始めること、運動だけで血糖を下げる必要はないことを伝える。また、通勤時間を利用するなど習慣化してもらえる指導が必要（糖尿病）
	病気の不安と療養上の負担への支援	・長期にわたる治療の中で、なかなか病状が改善しないこと、自己管理を継続しなければならない負担を解消することが必要（気管支喘息）
	家族の負担の軽減と教育	・患者が家族に迷惑をかけているという気持ちを抱かせないよう、できることは自分でやらせたい、必要となるときは手伝うという自尊心に配慮した関わりを促す必要がある（腰椎椎間板ヘルニア）

れていた。

【専門職のサポートの活用】については、慢性病者がかかりつけの病院で受けた療養指導の内容を生活の中で実践できるように取り込んでいること、また、病院以外でも行政主体の健康教室に参加したり、知り合いの専門家に意見を求めるなど、主体的に専門職のサポートを受けようとしていることが記述されていた。

【健康情報の収集】については、慢性病者がマスメディア等の媒体から健康関連の情報を収集しており、それらを実行可能な方法で療養行動に取り入れていることが記述されていた。

3) 生活を支援してくれる人の役割

学生が記述していた「生活を支援してくれる人の役割」の内容から、【療養上の負担を軽減する】【困難な生活機能を補う】【症状による苦痛の緩和】【気持ちを支える】【療養行動を一緒にとる】【療養上の相談と情報提供】【療養環境を調整する】の7サブカテゴリーが抽出された。

【療養上の負担を軽減する】については、支援者が慢性病者の療養行動が円滑に行われることを目的に、食事の準備やセルフモニタリングの協力、病院の送り迎えをしているほか、慢性病者が有職者の場合は周囲から勤務時間や作業内容についての配慮を受けていることが記述されていた。

【困難な生活機能を補う】については、支援者が慢性病者の担っていた家事役割を代替して遂行していること、着替えや食事、移動などの生活機能を補っていることが記述されていた。

【病状による苦痛の緩和】については、支援者が慢性病者の症状に対してマッサージを行っていることや移動時に介助するなどの慢性病に伴う苦痛症状を緩和するためのケアを行っていることが記述されていた。

【気持ちを支える】については、日常生活とともに過ごしている人の存在がづらいときや不安なときの精神的な支えとなり、療養行動を続けることの負担を慢性病者とわかち合っていること、また、支援者は慢性病者が無理な療養行動を行わないよう見守っている一方、自立意欲の向上のためにあえて手段的な援助を行わない場合があること

が記述されていた。

【療養行動を一緒にとる】については、特に対象が男性慢性病者である場合に記述が多く、支援者である妻や母が塩分やカロリー制限など家族の食事を療養上望ましい内容（塩分・カロリー制限など）に変更していることや、一緒に散歩をするなど運動療法を一緒に行っていること、血圧測定や血糖測定などのセルフモニタリングの協力をしていることが記述されていた。

【療養上の相談と情報提供】については、慢性病者が受診するときに同席して治療や療養の方向性を医療者と相談すること、慢性病者の病気や療養行動に関する健康情報を共有すること、療養行動について本人の目標が達成できるよう適宜指摘をしていることが記載されていた。

【療養環境を調整する】については、支援者である家族が高齢慢性病者の自宅の改築をしていることや介助用ベッドを導入したこと、職場や通院時の送迎、食事制限のためにお菓子や甘いものの買い置きをしないことなどが記述されていた。

4) 看護師としての役割

学生が記述していた「看護師としての役割」から、【病状コントロール習得に向けた支援】【病気の不安と療養上の負担への支援】【家族の負担の軽減と教育】の3サブカテゴリーが抽出された。

【病状コントロール習得に向けた支援】については、看護師が慢性病者の日常生活や病気や治療に対する価値観を理解できるようにはたらきかけ、日常生活と療養行動の折り合いをつけることを支援の中核とし、具体的な行動目標を病者と看護師が共有することの重要性が記述されていた。

【病気の不安と療養上の負担への支援】については、慢性病者が症状や病状の悪化により現在の生活を維持できなくなるといった不安がセルフケアの促進要因にも阻害要因にもなること、また、行動変容の必要性は理解しているものの日常生活の中で継続することの負担感を軽減できるようなはたらきかけることの重要性が記述されていた。

【家族の負担の軽減と教育】については、慢性病者にとって家族が重要なサポート源であり、必要に応じて家族の支援能力をアセスメントし、支

援が得られるよう教育・調整すべきことが記述されていた。

IV. 考 察

本研究は、看護大学生が成人看護学領域の科目である「成人慢性期看護方法」の課題として取り組んだ慢性病患者へのインタビューを通して作成したレポートについて、① 慢性病を有したことによる生活の変化、② 日常生活を送るための工夫、③ 生活を支援してくれる人の役割、④ 看護者の役割について記述されていた内容を抽出し、課題によって得られた学生の学びを明らかにしたものである。以下、本教育方法の学習効果と課題について考察する。

1. 本教育方法の学習効果

慢性病者の語りを聴くことは、机上の学習では得難い実感を持った学びを学生にもたらし、病者の個人史に触れることで自身の人生観や健康観の振り返りになると考えられる^{6,7)}。

学生は「慢性病を有したことによる生活の変化」について、慢性的な症状が日常生活行動全体に影響を及ぼすこと、症状がなくとも病気であるがゆえに仕事や対人関係などの社会的交流が阻害される場合があることを理解していた。また、セルフケアの継続は負担であるが治療のためにそれを受け入れ、取り組まなくてはならない状況があることを理解していた。「日常生活を送る工夫」については、慢性病患者が症状をコントロールしながら、また、自身の社会的役割と必要とされる療養行動との折り合いをつけながら日常生活を送っていることを学び、その方法は個人の疾病や生活背景によって多岐に渡り、必要に応じて専門職や家族の支援を受けられるよう調整していることを理解していた。「生活を支援してくれる人の役割」については、支援者の存在自体が精神的な支えになり、具体的な支援者の援助内容について理解していた。その一方で、支援者が慢性病患者の病態や具体的な支援方法がわからない状況があること、患者自身のためにあえて手伝わぬ状況もあることについても考察していた。「看護者としての役割」については、慢性病患者の病態や生活に関する情報

を整理し、その人にとっての病気の意味と療養行動の負担について理解しようとし、具体的な援助方法について考察することができていた。

これらの学びは、学生が慢性病患者の生活の場でその人自身の体験を直接聴くことによって得られたものと考えることができ、本教育方法の最も重要な効果と考えられた。また、対象者の病気や症状の特性について把握していないと意図的なインタビューや十分な記述ができないため、学生はその重要性を認識できる効果があったと推察する。さらに学生間でグループワークを行うことにより、似たような病態の慢性病患者であっても、その病気の意味や療養行動の負担の認知には差があることを理解できていた。この点についても本教育方法による学習効果と考える。

次に、このような学習効果が得られた教育方法の特徴について考察する。まず、学生にインタビューの視点とレポートのテーマを提示した点である。慢性病患者は、病気をコントロールしながら日常生活を送っている生活者である。したがって、看護実践では病気が慢性病患者の生活にどのような影響を及ぼしているのかを推測、理解しながら関わることが求められる。今回学生に提示したインタビュー時のキーワードは、その具体的な内容を問うために妥当なものであったと考える。さらに学習効果には、学生が課題と並行して授業を履修していた環境が影響していたと考える。講義や演習を通して病気の知識、病気が生活に及ぼす影響、看護者の役割などについて理解し、その学習が慢性病患者の対象理解や看護の考察に活用されていたと考える。

学生がレポートを作成するためには、対象者にインタビューするためのコミュニケーション能力、看護者の役割を検討するために対象者の情報を効率的に収集する能力、インタビュー結果をグループワークでプレゼンテーションし、評価する能力の活用が求められる。これらは看護実践において常に必要とされる能力であり、臨地実習に向けた準備としての位置づけとしても重要と推察された。

2. 本教育方法の課題

今回、インタビュー対象者の背景や病態の特徴によって、学生間の情報収集やアセスメント内容に差がみられた。慢性病であることの受け止め方は患者自身によって異なるため、その重大性は他者の評価のおよぶところではない。しかしながら、対象者が日常生活の変化がほとんどないと認識しているケースでは、レポートが対象者の返答内容の記載が中心で、十分な考察ができていない場合が多かった。

今後は、学生が対象者の有する慢性病の病態や治療について、基本的な知識を十分学習した上でインタビューに臨むよう指導を徹底すること、また、目標を達成するために対象とする慢性病を特定するなど、対象者の選定についてのオリエンテーションの工夫が必要と考える。

V. 本研究の限界

本研究では、学生が記述したレポートの内容を「学生の学び」として捉えたが、集団のデータとして分析を行ったため、個人がインタビュー対象者から聴いた事実を踏まえて看護者としての役割を考察できているかの分析はできなかった。慢性病者の生活に即した看護者としての役割を考察することなくしては、単に話を聴いたという事実しか残らないことが容易に想像できる。実際に本課題を学生に提示し評価する際には、慢性病者から聴いた事実をどのように捉えているか、またその内容を踏まえて看護者の役割が考察できているかを確認する必要がある。

VI. 結 語

学生は慢性病者へのインタビューとその学びを共有するグループワークを通して、慢性病者の具体的な日常生活や療養上の工夫、慢性病者が社会的役割と病者役割の双方を有すること、また、療

養行動が日常生活の一部であることを学び、その特性に応じた看護について考察することができていた。したがって、本研究で示した「慢性病を有する人の生活を理解する」教育方法は、学生の慢性病者への看護を理解する方法としての学習効果が示唆された。

謝 辞

本研究にご協力いただきましたA大学医学部看護学科3年生の皆様、インタビュー対象者の皆様に深く御礼申し上げます。

なお、本研究の一部は第39回日本看護学会学術集会（看護教育）で発表した。

文 献

- 1) 黒江ゆり子、藤澤まこと、三宅薫、普照早苗、山内香織：看護学における「生活者」という視点についての省察、看護研究、**39**, 337-343, 2006
- 2) 野並葉子：看護において生活をどう捉えるか、看護研究、**39**, 409-414, 2006
- 3) 下村裕子、林優子、井上智恵、河川てる子：看護が生活者の視点でかわるということ—糖尿病患者の理解と行動変容の「かぎ」—、プラクティス、**23**, 525-531, 2006
- 4) 伊波早苗、小田和美、丹下幸子、土屋陽子、小平京子：糖尿病患者に提供する実践知としての知識・技術—疾患・治療に関する知識・技術の看護仕立て—、プラクティス、**23**, 533-538, 2006
- 5) Corbin, J., Dorsett, D.S., Hawthorne, M.: *The Chronic Illness Trajectory Framework: The Corbin and Strauss Nursing Model*, Springer Publishing Co., 1992; 黒江ゆり子訳、慢性疾患の病みの軌跡、医学書院、東京、1995, p 1-31
- 6) 室屋和子、正野逸子、竹山ゆみ子：老年看護学における健康レベルの高い高齢者の理解に関する教育方法の検討、日本看護学教育学会誌、**15**, 49-57, 2006
- 7) 寺門とも子、大塚那子、石松直子、平川オリエ：高齢者理解のための効果的な学習方法、老年看護学、**7**, 88-94, 2002